

アンダースローの過去現在未来
～WBCにおけるアンダースロー表象とともに～

Everything about the Submarine Pitch:
Representations of the Submarine Pitch at the World Baseball Classic

1 K10C362-1

福田 太郎

主査 リー・トンプソン先生

副査 石井昌之先生

【目的】

アンダースローについて調べることで、野球の変遷の流れを読む。

筆者は大学まで13年間野球をやってきた。その中で、大学ではアンダースローに挑戦、転向した。そのきっかけは、斎藤佑樹さん、大石達也さん、福井優也さんといった黄金世代との出会いだった。アンダースローは、彼らを前に、自身がピッチャーとして生き残っていくために見出した、一筋の光だった。

アンダースローは、投げ方の困難さや負担の大きさ、指導できる人がいないなどの理由から、挑戦する人はあまりいない。昭和の時代には、山田久志投手などのアンダースローの投手がたくさんいた。栄枯盛衰を繰り返し、今では現役で活躍するプロ野球のアンダースローは二人となってしまった。しかし、その二人が希少な存在として、野球ファンのロマンとして、人気を博していることは事実だ。

アンダースローを武器とする数少ない投手が、どのような足跡を残したのか、どのように報じられるかを紐解くことで、アンダースロー投手の変遷を追い、野球の歴史、野球の報道の、新たな切り取り方を見出す。

【方法】

大きく分けて、「アンダースローの歴史」、「アンダースローの表象」という二本の大きな柱を軸に構成される。アンダースローの歴史について考察した章では、アンダースローのみならず、野球の起源までさかのぼっている。アンダースローの起源が、野球が生まれたばかりのころの、投法に起因するという説もあるからだ。

また、アンダースローの表象について研究するに当たって、今回特に重きを置いたのは、WBC (World Baseball Classic) である。WBC は世界大会と言うことで、日本国内での注目度も高い。球団等のひいきもなく、国内では団結し、代表チームを国の代表として応援する風潮が目立った。そのため、アンダースローの投手が所属するチームの状態や、ファンの態度の違いに左右されにくい

と考えられる。従って、アンダースローについて言及されているか否かにかかわらず、WBC に関して記されている論文や文献等も、先行研究の対象とした。

【結果】

歴史的な観点からは、タウンボールからの流れで受け継がれた、ジム・クレイトン投手らによる創成期のアンダースローが、オーバースロー解禁とともに衰退していった。また、ベースボールとなってからも、レイ・チャップマン死亡事故など、アンダースロー投手が世間の批判の対象となり、衰退するきっかけが生まれていた。

近年の調査においては、アンダースローの投手には大学野球、社会人野球を経験した選手が多かった。また、アンダースローの投手は野球に詳しく、引退した後に、監督やコーチとして、再び野球に携わる機会が多かった。

アンダースローの投手が報じられる場合、投球動作中の写真が用いられることが多いと考えていたことに関して。その傾向にあったが、登板しているからといって必ずしもその写真が取り上げられるとは限らなかった。

【考察】

アンダースローには、まだまだ未知な部分が多い。しかし本研究では、野球の起源までさかのぼることで、多少なりとも、その謎を解くことに寄与出来たと考える。

日米で栄枯盛衰を繰り返す中で、今日まで、脈々と受け継がれてきた根本にはいったい何があったのか。筆者自身が考えるに、その華麗さ、独創性が根底にあるように思われる。多くの投手がオーバースローやサイドスローといった、いわば代わり映えない、オーソドックスな投球フォームで戦うのとは対照的に、アンダースローの投手は全く違う角度から、ボールを投げる。その軌道は、“上から下へ”、ではなく“下から上へ”と伸び上ってくる。他の人がしないようなことに挑戦し、その中で、自分にできることを見出し、野球界で活路を見出していく。そんなアンダースロー投手の生き方に、人々は共感するのだろう。